日本組合基督教会の歴史と課題

——その百年にあたって——

竹　中　正　夫

目　　次

はじめに
第1章　日本組合基督教会の結成
第2章　日本組合基督教会の性格
　1. 自治の精神　　2. 自給の精神
　3. 自由の精神
第3章　三元老の苦悩
　小崎弘道の苦難　　海老名弾正のゲッセマネ
　宮川経輝の内省
第4章　日本組合基督教会の課題
　教会の自治と連帯　　教会の独立と地方の教会
　教会の社会的責任　　朝鮮伝道の開始
　三・一独立運動に対する態度　　朝鮮伝道の放棄
　吉野作造の批判
第5章　同志社神学の課題
　大塚節治の見解　　同志社の存立について
　『同志社神学叢書』　　活ける神学校のすすめ
むすびにかえて
　批判的視点　　新島のねがい　　基本的姿勢

はじめに

1986年は，1886（明治19）年4月に京都で日本組合基督教会が結成されてから100年になる。100年の歴史を省みその課題を検討し，合同教会としての日本基督教団のなかで，その精神を生かすことが期待されている。従来からの日本組合基督教会史には，つぎの二つがあるが，何れも未定稿となっており，時を得て正史が編纂されることが望まれている。

小崎弘道，『日本組合基督教会史』1923年，163頁

湯浅与三『基督にある自由を求めて—日本組合基督教会史』1958年，404頁

日本組合基督教会史の編纂がはかられたのは，1894（明治27）年で委員があげられ，資料が集められ，その後，1906（明治39）年に某氏が委員の委嘱によって，1883年までの原稿を作製した。その後，小崎弘道が編纂委員となり，あらためて原稿を書き直し，約10年かかって脱稿，委員はさらに検討，修正を加えたが結局は未定稿として1923年に出版された。

1941（昭和16）年6月，日本基督教団の創立にともない，日本組合基督教会が解散されるにあたって，日本組合基督教会歴史編纂委員会は，湯浅与三に，日本組合基督教会史の執筆を依嘱した。彼は，1941年9月から，翌年6月までの10カ月にわたって執筆をなした。それに傾倒された努力は並々ならぬものがあった。しかし，戦時下の困難な状況にあって，資料蒐集は思うように行かず，委員会は，その原稿を筆者に返却し，1958年筆者の責任において，二段組タイプ印刷というかたちで限定出版された。

この外，日本組合基督教会史に参考となるものとしてつぎの文献をあげることが出来る。

三井久「日本組合教会について」『キリスト教社会問題研究』，同志社大学人文科学研究所，第23号，1975年3月

関東同信会編『日本組合教会の特長と今日的課題及び日本組合教会規約等』1984年，144頁。

高橋虔「日本組合基督教会年表」(1)—(4)『キリスト教社会問題研究』同志社大学人文科学研究所，第16，17号（1970年），第18号（1971年），第20号（1972年），第30号（1982年）。

土肥昭夫「日本組合基督教会の信仰職制について」『基督教研究』同志社大学神学部，第46巻第2号，1985年3月。

杉井六郎『遊行する牧者—辻密太郎の生涯』教文館，1985年469頁。

このうち，高橋虔氏の「日本組合基督教会年表」は，各個教会の設立，総会，教師会，婦人伝道会，信徒大会，教職者の生年月日，按手礼，教職の就任，辞

任，死亡年月日，関係宣教師の着任年などが丹念に年代順に記録されており，組合基督教会の足跡を辿るのにはきわめて重要な業績である。

最後にあげた杉井六郎氏の辻密太郎についての記録は，単に開拓的な一伝道者の伝記を綴ったのみではなく，地方に，あるいはハワイ米国本土の伝道に苦闘した遊行する牧者の行蔵をえがくことによって，未定稿として終っている日本組合基督教会史の定本を築き上げるための隅石としての貢献をなしている。さらに、地方に生きた一人の牧者の足跡を追ったものとしては，中野次郎『ホノム義塾』(曽我部次郎伝，1985年，296頁)，や竹中正夫『士に祈る—耕牧石田英雄の生涯』(教文館，1985年，290頁)，などが近年の労作としてあるが，これらは，一牧者の伝記をこえて，数多くの地方にあって黙々と開拓的な働きにあたった牧師たちの足跡を記録する作業の一里塚ともいえよう。たしかに辻密太郎，曽我部四郎，石田英雄といった人びとは，貴重な働きをしながらも，その地方で彼らに接した人びとを除いては，殆んど顧みられなかった人びとであり，中央を視点とし，大都市を中心とした従来の教会史ではとりあげられなかった人びとについての克明な評伝が，昨年（1985年）に相ついで出たことは，偶然とは言えない歴史的な意義を覚えるものである。なお，名称は設立当初は，日本組合教会と称し，1902（明治35）年から日本組合基督教会となっているが，本稿では略して組合教会と称したときもある。文中〔　〕内の記事は筆者の註である。

第1章　日本組合教会の結成

日本組合基督教会の背景としては，1869（明治2）年にD・Cグリーン夫妻を送って，日本伝道をはじめたアメリカン・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions）の働きがある。その働きによって神戸に最初の教会（摂津第一公会）が，1874年に設立され，日本の伝道は日本人が当ろうという精神から，1878(明治11)年に日本基督伝道会社が結成され，それが，1886年の組合教会の結成の母体となったことは周知の通りである。この間においてきわめて重要な役割を果しているのは，「同志社のペンテコステ」といわれる，1884（明治17）年に同志社でおきたリバイバルに運動である。当時の同

志社の学生であり，桂園派の歌人であり，並々ならぬ日記マニアであった池袋清風は毛筆で当時のリバイバルの模様を丹念に記述した。

その復刻版(『池袋清風日記，明治17年，上・下』同志社，1985年上巻289頁下巻305頁）が出版され，当時のリバイバル運動がいかにすさまじいものであり，また，それによって心燃えた学生たちが地方の伝道にすすんであたった様子をまのあたりに知ることが出来る。

アメリカン・ボードの日本伝道の背景には，竹かごをめぐる祈会のあったことは広く知られている。1827年アメリカンボードの役員をしていたブルックライン（ボストン市中にある独立の町）の商人W・ローブス（William Robes）の家で外国伝道のための祈会が開かれ，席上に集められた献金27ドル85セントを，そこにあった日本製の竹かごをみて，いまは鎖国のためにどざされているが，いつの日かその門の開かれるときに備えて，日本伝道のために献金することにした。やがて，裁縫仕事で得た婦人たちの據金も加わり，1869年アメリカンボードが日本伝道をはじめたときには，約4000ドルに達していた。ここでも日本伝道が熱心な信徒たちの祈りによってはじめられたことを知ることが出来る。

さらにさかのぼると，アメリカンボードの設立にあたってマサチューセッツ州のウイリアムズ大学生たちが，雷雨の中を世界伝道のために献身を祈ったヘイスタック運動がある。それは1806年のことであった。彼らは干草(ほしくさ)のかげに祈って世界伝道のために自らを献げることを誓い，その若者たちを支援するために1810年にアメリカン・ボードが設立されたのであった。組織があって伝道がはじまったのではなく，祈りがあって組織が生れたのである。

さらに，アメリカン・ボードを起した人びとの背景をたずねると，ニューイングランドで大覚醒運動（The great awakening movement）に影響を及ぼしたジョナタン・エドワーズ（Jonathan Edwards）の思想にまでさかのぼることが出来る。エドワーズは，当初イェール大学で教鞭をとり，のちにマサチューセッツ州のノーザンプトンの教会の牧師をつとめ，人間の自由意志を批判的に論じ，人間の罪の普遍性を指摘し，すべての人びとに悔い改めをせまった。国内伝道にしろ，外国伝道にしろ，ハーバードを中心にした理性的なユニテリアンの人たちからおきたのではなく，ジョナタン・エドワーズの影響をうけた

イェールを中心にした新しい光（The new light）というグループから伝道活動がおきていったという事実を忘れてはならない。

イェール大学で倫理学を講じていたH.リチャード・ニーバーは，その初期の著作である『アメリカにおける神の国』(The Kingdom of God in America, 1937) においてアメリカ合衆国におけるキリスト教の特色としてつぎの三つの点をあげている。

すなわち，第一は既成の教会の制度的キリスト教ではなく，むしろ自発的な運動として展開されたキリスト教 (Christianity as movement), 第二には，この世と神の国との弁証法的関係 (A dialectical relation)，第三はカルヴィニズムの影響をうけた生ける神の主権の承認に基づく信仰 (Faith in a sovereign, living God) の三点である。

たしかに，米国のキリスト教の歴史において，大覚醒運動 (Great awakening movement), 宣教師運動 (Missionary movement), 学生献身運動 (Student volunteer movement)，また社会的福音運動 (Social Gospel movement) というような運動としてキリスト教が展開されてきた。そして，それらの運動が，神の主権の信仰の下につねに人間の罪の現実と神のめぐみの弁証法的関係において展開されてきたことが理解される。干くさの祈禱会といい，竹かごをめぐる祈会といい，さらに同志社のリバイバルといい，聖書に証されたイエス・キリストにおける罪のゆるしの信仰に基づくものであり，それにこたえて情熱をもった運動として展開されたものであった。

何れにしても，日本組合教会設立の背景には，信仰覚醒運動に発し，祈り会にうけつがれ，さらにリバイバル運動によってたかめられた敬虔な信仰のパトスのあったことを忘れてはならない。

1886 (明治19) 年日本組合基督教会結成のときの教勢をみると，教会数は31，牧師18名，会員は 3,465 名であった。それから55年を経て，1941年に日本基督教団に合同するために解散したときの教勢は，教会数160，伝道所37，牧師 121 名，伝道師57名，会員は33,523名であった。

ちなみに，第一号の按手礼をうけたのは，澤山保羅（1877年）で，最後の按

手礼の受領者は，下杉勝治（1942年）で，第419号であった。また，婦人として最初に按手礼をうけたのは長谷川初音（1935年）であった。

総会は，当初は毎年春，神戸，大阪，京都，東京の順番に開かれた。これは，一つには，各地の交流を深めるためにはかられたものと思う。ときに前橋（1901年），岡山（1891年，1903年，1937年）でも開かれた。1900年の第16回の総会から毎年秋に開かれるようになった。代員の旅費は，多くの場合各個教会が負担をし，開催地の信徒たちは家庭を開放し地方からの教職者たちを迎えて宿泊の世話をなし，それがまた暖かい交わりの機会ともなった。総会と相前後して，教師会と信徒大会そして婦人伝道会総会が開催されていた。第一回の教師会は1895年10月に奈良で開かれた組合教会教役者大会で54名の参加者があった。第1回の婦人伝道会総会は1907年に開かれ，参加者約200名，会員となったものが，494名であった。ちなみに，第1回の信徒大会は1904年10月に京都で開かれた。

第2章　日本組合基督教会の性格

多様な側面をもつ日本組合基督教会の性格を要約することに困難であるが，(1)自治の精神(2)自給の精神(3)自由の精神の三つの点をあげることが出来よう。これらは，先人たちが強調して，大切にしてきた日本組合基督教会の精神的遺産であった。

1．自治の精神

47年にわたる新島襄（1843—1890年）の短かな生涯において，彼が全身全霊を傾倒してその実現を求めてやまなかったものは，自立し，自ら治める人間の形成であった。彼は，1888（明治21）年11月にあらわした「同志社大学設立の旨意」にこうのべている。

> 立憲政体を維持するは智識あり，品行あり，自ら立ち，自ら治むるの人民ならざれば能はず，果して然らば今日に於て，此の大学を設立するは，実に国家百年の大計に非ざるなきを得んや

「自由教育，自治教会，両者併行，国家萬歳」は，新島の愛称の句であり，しばしば，彼の弟子たちにこのことばを書き送っている。（新島襄書簡，横田安止宛，明治22年11月23日付，大久保真次郎宛，明治22年月日不詳）また，1890年1月27日，新島襄の葬儀のとき，若王子にむかって，柩（ひつぎ）を中心に，雨の中を数千人のひとびとの行列がつづいたが，そのときに，20本ほどの幟（のぼり）があり，その中には，勝海舟の揮毫による「自由教育自治教会両者併行邦家萬歳」という幟旗のあったことが伝えられている。（『国民新聞』明治23年2月4日，加藤延雄，久永省一『新島襄と同志社教会』昭和61年，102頁参照）

新島がいかに自治教会を志向したかは，「一致・組合両教会の合併についての稿」に明らかである。右の稿は，全部で18あり，その内容は可成り重複しているので，代表的なものを要点をあげてみることにする。

1. 今ノ憲法［合併によって出来る合同教会の憲法］ノ儘（ママ）ヲ以，両会聯合ヲ為サントナレハ小生ハ不同意
1. 両会聯合ニ関シ尤吾人ノ注意ヲ要スヘキ所ハ，両会ノ主義如何ヲ分析スルニアリ

○一致ノ体裁ヲ論スレハ，貴族的即中央集権政治，又我カ組合会ノ体裁組織ヲ論スレハ共和的即地方分権主義ト言ハサルベカラズ（新島襄「一致・組合両教会合併問題に関する稿15」『新島襄全集2』同志社，1985，527頁）

従来から1889年から1890年にかけて議せられた一致・組合両教会の合同が不成立に至った理由として二つ原因があげられていた。一つは，双方が委員をあげて合同について協議していた過程において，連絡不充分のために齟齬をきたしたというもので，とくに，一致側から小崎弘道にあてた電報が伝わらずに，一致教会の代員が神戸に到着したときには，組合教会の総会は議事を終了して解散してしまったあとであるという喰い違いがあったことが指摘されている。（小崎弘道『日本組合基督教会史』前掲書，はこの立場をとっている。なお，合同問題の全体的経過分析については，土肥昭夫『日本プロテスタント教会の

成立と展開』1975年，78頁以下参照)

第二の原因としては，アメリカン・ボードが合同に反対であり，それをうけて新島襄が反対としたという見解がある。これは，主として，一致教会側の人びとによっていわれてきたところである。しかし，アメリカン・ボードの立場は決して一様なものでなく，事実宣教師たちの意見は分れていた。J. D. ディヴィスは合同に反対であり，D. W. ラーネッドは賛成であった。たしかに新島は当時提起されていた合併案に反対であった。しかし，その主な理由は，外国のミッションボードの意向によるものでなく，両教会の組織体制から考えてみてのことであった。一致教会は中央集権的であり，少数の独裁になることが多いのに対し，組合教会は地方の教会の自治を重んじ，一人ひとりの構成員の参加を大切にするものであるという点にあった。新島襄の考えの中には，これからの日本の教会は，これからの日本の社会の在り方を指し示すものであるべきであるという信念があった。

○寡人政府主義　○中央集権　○古来ノ遺伝物
○衆治主義　○地方分権力　○近世ノ新発明
○我カ邦家千百年ノ後ノ世迄自由ノ泉トナルヘキ民治衆治主義ヲ失フノ憂アレハ，我カ必ラスムシロ旗ヲ立テ　我カ自由ノ為ニ戦ハサルヲ得ス
○今ノ一致ハ早婚ナリ
○大儀見［元一郎］長崎行キヲ中会ヨリ命セラル。之ヲ辞セシカハ月給ヲ与ヘズト言エリ　Can you bear such an oppression?
○聯合ハ可ナリ，ヨメ入ハ甚不同意ナリ　(同稿7『新島襄全集2』508頁～509頁)

新島は，合同教会の憲法草案を自ら丹念に検討し，問題点を指摘するとともに，各個教会においても憲法についての検討をした上で，合併についての態度を決めるべきであると考えていた。四条教会［京都教会］の文書のなかには廻章（明治21年11月19日付）があり一致・組合両教会の合同の議が組合教会の総会ではかられるにあたって，四条教会の態度を相談し，代員に托するため至急会合を開くことを通知したものがある。その後も，憲法についての研究会を開

いている。(『京都教会百年史』1985年165頁—167頁) このことは，各個教会のレベルで新島の意向を反映したものとみなされる。

2．自給の精神

教会の組織体制の上から，自治が主張されたとするなら，教会の経済的な在り方として，独立が説かれた。自治の精神の主唱者が，新島襄であったとするなら，独立の精神の推進者は澤山保羅であった。彼は，米国における研鑽を終えて帰国し，中央に高給をもって迎えられる機会があったにも拘らず，1877年1月に浪花教会をおこし，自らは7円の月給に甘んじ，ミッション・ボードからの独立を身をもって示した。彼の自給教会論は，1883 (明治16) 年4月に大阪で開催された宣教師大会で発表されたもので，日本の教会の財的独立の運動の思想的基盤となったものである。他のミッションフィールドに形成された諸教会に比較するならば，日本においては，教会の財的独立が比較的早く達成されたことが認められる。また，日本組合基督教会は，アメリカンボードからの経済的独立を1895 (明治28) 年に決議し，1905 (明治38) 年に達成した。このことは，他のプロテスタント諸教派に比べると可成り早い段階において教会の独立を実現したということが出来る。これには，さまざまな要因があったと思われるが，澤山保羅の教会自給論が大きな力となっていたことは否定出来ない事実である。彼は，抽象的な目標として自給論を説いたのではなく，貧苦に甘んじながら自らの体験を通して独立論を主張したところに説得力があったということが出来る。

3．自由の精神

1898 (明治31) 年，霊南坂教会で開かれた第13回日本組合基督教会総会において，宮川経輝は日本基督伝道会社創立20周年講演をなした。宮川は，「我党の特色」という題で，組合教会の特色として，1. 精神を先にして形骸を後にす，2. 日本の伝道は日本人之に任ずる心構，3. 寛容ということの三つをあげている。寛容について宮川はつぎのようなエピソードをのべている。1897年組合教会は余り寛容すぎるから信仰箇条によって制裁を加えようとした。それに

対して宮川はつぎのようにのべた。

ガマリエルの故智［使徒行伝5上33—42］に倣って彼の言うことが真理であるならば立ちましょう。私共の言うことが真理であれば貫きます。何ぞ人為陶汰を用いましょう。真理の在る所に随って自己の本領を以て立てば如何なる者があっても苦しく御座らぬ（湯浅与三，前掲書252頁）。

自由の精神とは，思想と神学における自由を意味していた。何といっても，自由主義思想の指導者は，海老名弾正であった。彼は今世紀の初めの20世紀大挙伝道にあたって福音同盟会から除名された［明治35年4月］。表面的には，海老名の三位一体論についての神学的立場が除名の理由であったが，内実には，地方から東京にやって来て，いままであまり振わなかった東都伝道でにわかに人を集め出した海老名に対するそねみがこめられていた。植村正久と海老名弾正の間に神学論争がなされたが，海老名は月刊『新人』に「福音新報記者に与ふる書」（『新人』明治34年10月）「三位一体の教義と予が宗教意識」（『新人』明治35年1月）などの論文で自己の立場を明確にのべたのに対し，植村の方は，週刊『福音新報』上で海老名に対する問いと批判をのべ，自己の立場を赤裸々に開陳するに至らなかった。これよりさき，1897年に，海老名の牧する本郷教会は，日本組合基督教会を脱退したので，さきの福音同盟会からの除名と関係があるように誤解されているので経緯を明らかにしておく必要がある。

1897年に，海老名はいままで牧会していた神戸教会を辞して，押川方義，横井時雄，巌本善治，などと相談して，教派をこえて東京の伝道を推進する計画をたてた。海老名は，それをまともにうけて，自ら本郷教会を解散し，組合教会から脱退して，新しい超教派の伝道に挺身したのである。福音同盟会の場合は，海老名の弁明を聴取する機会もなく，異端の折紙をつけられて除名されたので，伝道戦線の同僚から後討をされたにもひとしかった。本郷教会の組合教会からの脱退（1897年）と，海老名弾正の福音同盟会からの除名（1902年）は，年代的にもかけ離れているのみでなく全くちがった動機と原因によっている。ところが小崎弘道の編した『日本組合基督教会史』によると，両者はさしたる説明もなく併記されているため誤解を生ずる嫌があったことは，否めない。そ

の後1903年本郷教会は，前橋で開かれた組合教会の関東部会で再加入をなし，1907年本郷教会は日本基督教会同盟のすすめをうけいれて加盟をなした。海老名弾正の娘大下あやの伝えるように，海老名弾正は晩年に至るまで植村正久と暖かい交わりをもっていた。（大下あや『父海老名弾正』昭和50年，103頁以下），また一時は中傷と思われるようなはげしい批判をした植村正久も，海老名弾正の信仰が区々たる理論によるのでなく深い宗教的な体験に根ざしていることを認めていた。（竹中正夫「海老名をとらえる視点」『キリスト教社会問題研究』昭和50年第23号）

さて，ここで問題の海老名弾正のキリスト論に触れておく必要がある。海老名は，たしかに父なる神を信じ，子なるキリストを信じ，また動的な聖霊の働きを信じていた。しかし，彼は，三位一体論の伝統的な形態を鵜呑みにして受けいれなかった。彼はキリストを救主と信じ，とくにキリストの復活を強調していた。しかし，キリストは神であるという表現はとらなかった。むしろ，神はキリストにあって働いたと理解した。たしかに彼のキリスト論はその神聖を強調する「高いキリスト論」（High Christology）ではなく，むしろその人間性に力点をおく「低いキリスト論」（Low Christology）であった。しかし，重要なことは，聖書に証しされたキリストぬきに彼の信仰はなかったということである。キリストは，その生涯，苦難を通して天地宇宙の根源的生命である神をあらわした存在であった。それ故に，海老名は終生キリストに従い，決してユニテリヤンにならなかった。

組合教会の中においても，キリスト論に巾（はば）があった。決して一つに画一化されていなかった。勿論，キリストが中心であることには変りはない。しかし，そのキリストをどう理解するかという点において各自の体験や賜物による独自性が許容されていた。日本組合基督教会の年鑑にあたる毎年の『便覧』をみると，冒頭に「信仰の告白」を記し，ついで奈良大会（1895年）の「宣言」を掲載している。前者のキリスト論は，高（ハイ）キリスト論（ロジー）であり，後者は低（ロー）キリスト論（ロジー）である。前者は小崎弘道によって起草され，後者は，海老名弾正によって起草されたものであった。両者を認めあっているところに組合教会の自由の精神，宮川経輝のいう寛容の精神があった。

1900（明治33）年5月，日本組合基督教会の第15回総会が京都で開かれたとき，当時四条教会の牧会にあたっていた油谷次郎七の按手礼式が行われた。其頃は，按手礼式の前に，受按予定者が口頭で信仰の表白をなし，列席の教師たちがそれを諒としてから按手礼をするという順序であった。ところが，油谷の信仰告白には質疑が百出し，仲々まとまらず，教師会では3年延期説が出たりして紛糾した。すると，かつて四条教会の牧師であり，油谷の信仰の立場をよく知っていた堀貞一が立ってつぎのように一喝した。

油谷氏に按手礼を授けざれば，予は按手礼を献上すべし，3年の後には油谷氏が諸氏の信条に服すべしと思ふか，将た諸氏が油谷氏の説に服さんとするか(『新人』第4巻12号，明治36年12月号)

このことばがきいて，遂に油谷に按手礼を授けることになったという。このときの油谷の信仰告白の内容を伝える記録はないが，その翌年に，油谷が海老名弾正に送った書簡においてつぎのようにのべている。

先づ雅量と識見を以て人材を網羅し喜んで人物の活動し得る天地をつくること肝要と信じ候。思想界も固陋頑冥の先生たちに天下は己に飽き居り申候。決して天下を服するものには之無く候。さればとてユニテリヤンや唯理論派では人々の宗教心は満足を得べからず，活ける信念は此先生たちに望むべからず。肉躍り血湧き理想をかへ志気即ち立つの夫信仰を鼓吹するの任は正く吾党の使命と信じ申候（明治34年11月15日付，海老名弾正宛，油谷治郎七書簡）

ここで重要なことは，海老名も油谷も，自由主義者とみなされたが，彼らは決してユニテリヤンにならなかったということである。彼らにとって肝心なことは，イエス・キリストを決定的な救主としてとらえることであった。たしかに，海老名弾正は，伝統的な三位一体論の形体を鵜呑みにしなかった。しかし，彼はキリストに対する決定的な忠誠心（decisive committment）をいささかも曖昧なものとしなかった。それを表現するにあたって，彼は伝統的な信条の形体をそのままにとらなかった。むしろ，彼は，イエス・キリストにおいて顕現した神の生命がそれぞれの時代に，また，さまざまな民族の中にどうあら

われていたかを学び，キリストにあらわれた霊能が日本の土壌において，そして日本人のなかにどのように体験され，展開されるかということに主たる関心を寄せていたと言えよう。

たしかに，海老名のキリスト論には，人の子としての色彩が強いことは事実である。しかし，大切なことは，彼は，キリストを神の子，救い主として告白し，自らの体験にてらして，生涯そのことを証し続けた熱烈な伝道者であり，宗教思想家であったということである。そのことは，何人も否定出来ない事実であった。

自由主義の立場をとるということは，それぞれの人びとの主体性を尊重するということに外ならない。それは，ともすれば，自由放任となり，おのおののなすがままにまかせるという放縦にもなりかねない。こうした点を見ぬいて，宮川経輝はつぎのように自戒している。

> しかし，此精神を私共が維持しようと思うならば，他の諸教派の諸君よりも数層倍の刻苦勉励致しまして，我心情を練らなければならぬのであります。（宮川経輝，前掲文書）

アメリカン・ボードの宣教師として，同志社で53年の間，教育と研究にあたったD.W.ラーネッド（Dwight W.Learned）は，1928年，日本を去るにあたって，日本組合基督教会へ訣別の挨拶をおくった。彼は，その中において，組合教会の特色として，1.キリスト以外に何者の仲保者によらないとする信仰の自由，2.教会の自治，3.各自の神学思想の自由の三点をあげたのち，そのような自由の精神を大切にしようとするならば，一人一人の責任の比重が重くなってくることを力説してつぎのようにのべている。

> 自由の精神を重んずることは，個人の信徒にとっても，教会の指導者たちにとっても，大きな責任が加味することを意味している。もしも，個人の義務が，単純に教会の教えに従い，教会の規則を守り，その礼典に与ることを意味するのなら，責任は比較的に小さなものである。組合教会においても，充分に勉強する時間や能力をもたない人たちもいるし，自分たちが教えられ

たところをそのまま受けいれている人たちもいる。しかし，理想からいうと，出来るだけ多くの人びとが，知的に宗教について学び，自分自身の責務について注意深く思慮し，一つのからだの一員として教会の働きに主体的に参加するようにつとめるべきである。(Dwight W. Learned, A Farewell Message To The Kumiai Church, 1928, p. 3 拙訳)

第3章　三元老の苦悩

日本組合基督教会には，誰いうことなく三元老があり，教会の指導者として尊敬されていた。小崎弘道，海老名弾正，宮川経輝は，いづれも熊本バンドの出身で，同志社英学校の第一回の卒業生であり，霊南坂，本郷，大阪という日本組合基督教会の有力教会の牧師をつとめ，かつ，かわるがわる日本組合基督教会の有力な役員をつとめるなど指導的な役割を果した。彼らは，それぞれちがった性格をもっていたが，各自の特色を発揮しあいながら，温い交わりをもちつづけた。彼らは，比較的長寿を全うし，三者の存在が組合教会の経続性と一致を象徴していた。この点からいうと三元老はカリスマ的権威をもっていた。しかし，われわれは，三元老を愛敬するあまり，彼らを神格化してはならない。彼らのすぐれていた点は，むしろ内に宿していた弱さや欠点をたえざる努力精進をもって克服していた点にあった。そのような意味から三元老の苦悩について学んでみたいと思う。

小崎弘道の苦難

小崎弘道は，青年時代より長者の風あり，熊本洋学校でも指導的役割りを果し，つねに中央にあって基督教界を代表するとりまとめ役といった存在であった。しかし，その自筆の日記をみると内的な苦悩と反省のあとを知ることが出来る。

明治17年1月3日　余性怠慢ニシテ事ニ務メス　殊ニ事ヲ遷延スルノ弊甚シ故ニ成ル可キ事モ終ニ遂クルヲ得ズ　為メニ主ノ恩寵ヲ空クスル事少カラズ今年改ムルニ際シ宿弊ヲ感ス（中略）　将サニ聖霊ノ恩祐ニ依リ此宿弊ヲ削除シ年ト共ニ新ナラントス(『修業録』『小崎弘道自筆集(11)』)

明治19年9月26日（雨）　午前会堂ニテ説教ス　雨天ニテカ集ルモノ甚々少シ余ノ説教尚力ナキヲ覚フ（中略）　説教ノ後会読ハ人少キヲ以テ休会ス　夜ハ説教海老名兄ニ依頼ス余ハ自宅ニ読書ス

明治19年10月12日（火）曇　午前会堂ニ行テ聖書ヲ読ミ祈禱ス　自ラ省ルニ信望愛ノ乏キハ勿論常ニ怠惰優々不断ニシテ何事ヲモ勉強スル事ナク旦情欲ニ負クル事多キモノナリ

明治19年12月3日（金）晴　今朝ヨリ毎朝午前六時ヨリ祈禱スル事ヲ始ム

明治19年12月31日（金）晴　午前青山ニ行キ祈禱幷ニ黙念ヲ為ス種々感スル所アリタリ　又説教ノ支度ヲ為セリ（中略）茲ニテ明治十九年モ遂ニ尽キタリ此一年間我一身ノ上ニテ変遷アリシ事少カラズ　又神ヨリ受ケシ恩寵ヲ省レバ実ニ数ルニ遑アラズ　然レトモ一身ノ事ヲ省レバ失策セシ事，罪ヲ犯セシ事，神ノ聖意ヲ感セシ事幾回ナルヲ知ル可ラズ　願クハ年ト共ニ一身ヲ新タニセント欲ス

今爰ニ余カ短所又ハ罪科ヲ掲クレバ第一，勇気乏シキ事，第二，軽躁ニシテ事ヲ為スノ初メ十分ノ思慮ヲ為ズシテ跡ニテ悔ル事多キ事，第三，優々不断事ヲ決行スルノ勇気足ラサル事，第四，遷延事ヲ推シ送ルノ弊アル事，第五，怠惰ニシテ勉強心ナキ事，（欄外）第六，事ヲ為ス熱心ノ足ラサル事

是レ皆ナ消極ノ欠点罪科ナルガ積極ノ点ヲ挙クレバ亦左ノ如キ事アリ　即チ第一，虚栄ヲ求ムルノ心多キ事，第二，嫉妬ノ心大ナル事，第三，驕慢ナル事，第四，肉慾盛ニシテ之ニ負ケル事多キ事等ナリ　願クハ大能ノ神ヨ此罪人ノ主ナル此僕ヲ憐ミ年共新ニ其心ヲ洗ヒ給ハン事ヲ　アーメン　（『小崎弘道自筆集(12)』）

小崎弘道は1856（安政3）年の生れであるから明治19年には，30歳であった。彼は自らの欠点を反省し，一つ一つの短所をあげ，さらに積極的な罪科を列挙して自戒し，心を新らたにして励むように祈っている。

それから24年たち，1910（明治43）年小崎は54歳，霊南坂教会は発展をなし，小崎は外的には，日本日曜学校協会の会長（1907年）となり，日本宣教開始50年の記念祝会には委員長（1909年）をつとめるなど，キリスト教界を代表する役割を果し，内にあっては，1905年に霊南坂教会は創立25週年行事を盛大に行

い，同年8月からは，夫妻とともに太平洋沿岸の日本人の伝道旅行に赴き，1906年6月霊南坂教会は小崎弘道牧師夫妻の結婚25周年の感謝式をなし，記念品を呈するなどして，一見すべてが順調に運んでいるかに見えた。

しかし，当時（1910年）米国留学を終えて帰ってきた松山常次郎が主だった教会員の家庭を訪問してみると，小崎牧師に対する不平が相当強く存しているのを知っておどろいた。松野菊太郎，宮川己作などの副牧師はあいついで辞任し，三井久次も一時執事をしりぞくなど小崎に対する批判が会員の中にあることを知った。松山は伝道師栗原陽太郎とともに，小崎弘道をたずね，率直な話しあいのときをもった。

両人［松山・栗原］「先生が如何に御苦心なさっても会員は先生の偉大を認めようと致しませぬ。一層のこと渡米して太平洋沿岸でお働きになっては如何ですか。それが為めに松山は再渡米にお伴しても宜敷ございます」

小崎「自分は同志社社長の時代に宣教師から異端と目されて居るから北米伝道は出来ない」

両人「それでは御郷里九州一円の伝道は如何でございますか」

小崎「それも覚付ない」

その時，傍らに在った小崎夫人は言った。

「教会員中牧師を支持するものが五分反対するものが五分，今去就を決するのは早過ぎます。若し反対する人が六分となれば辞職しませう。」

（湯浅与三『小崎弘道先生の生涯』34頁。

この年の暮の小崎弘道の日記をみると，1910（明治43）年12月28日，朝10時ごろひとり家を出て，千葉県稲毛の海岸に赴き，散策のときをもち，小山村の神社の境内で聖書をよみ祈禱をなし，Komersky, The Labyrinth of the World and the Paradise of the Heart という修養書をよみ瞑想にふけった。小崎は『天路歴程』を彷彿とさせたといっている。夕刻稲毛の一流の旅館である海気館に赴いて宿泊を乞うたところ，宿の方では，どことなく気落ちした小崎の風貌をみてか，3等客として遇した。小崎はこれに大変不満であったが，そのおかげで帰途の旅費をあてがうことが出来た。事実，日記によると，28日，29日の両日彼は昼食をぬきにしている。小崎が稲毛にわざわざやってきたのは，先

述のように，果して霊南坂教会に止まるべきか，他に転ずべきかを煩悶のあげく，ひとり静かに内省するためであった。その年の歳晩の所感をつぎのように記している。

年々歳々暦を改むる毎に幾重か革新をしたかなれども，今日迄は更らに何かの効果あるを見ない。省れば私も己に知命に加ふるに6年にならんとして居る。今年は今年と云ふても最早余年がない。若しも爰に根本より改めて一身と事業に一生面を開くことが不可能であったならば，自ら天命と覚り処決する事がなからねばならぬ。

年が新なると共に一新せねばならぬ事は

1．更らによく勤勉なる事，毎朝6時に起き聖書を読み神に祈禱し兼ねて計画中の著作に力を尽くす事。

2．更らによりよく克己する事。凡ての慾に克ち肉体を苦むる事。

3．一生懸命神に依りすがって伝道の為め力を尽す事。

4．四十四年の大事業は

(イ)拡張　(ロ)会堂の新築　(ハ)雑誌の発行　(ニ)著書の出版　(『小崎弘道自筆集(35)』)

小崎は，翌，1911年の1月1日の礼拝の説教で稲毛海岸における歳晩の所感を朗読し自らの反省と決意のほどを会員に伝えている。

海老名弾正のゲッセマネ

海老名はよく自由主義者であり，楽観的人間観をもち，罪の意識が乏しかったように思われている。しかし，海老名は内的に自己の罪性を深く自覚し，それと苦闘した経験をもっていた。彼は，1878(明治11)年，21歳のとき，京都の同志社に在学中，眼病を患い，心身に疲労を覚え，悶々内省のときをもった。

7月20日［明治11年］京都に帰ったが，私は体も疲労し，眼も衰弱し，秋よりの勉学に堪えなくなった。（中略）私は無聊の時間が多いので，散歩と瞑想とに時間を消したのであるが，快々として楽しむこと能はず，そこで私

は快鬱の由って来る所をたしかに衝き留めようと深く考慮を重ね，瞑想から瞑想に耽ったのである。一日豁然として悟った。畢境するに，私には根強い欲望がある。この欲望が遂げられざる為めに，私は憂鬱に沈むのである。（渡瀬常吉『海老名弾正先生』竜吟社，昭和13年，150頁）

彼は眼病とともに爽鬱病にかかり，その原因は，自らの欲望にありとし，肉欲，名誉欲，権勢欲，知識欲などをが自分の中に深く存することを省み，懺悔と共につぎのように記している。

私は天地の罪人である。（中略）私は深刻なる罪の自覚を体験し，前の憂鬱は一変して煩悩苦悩になった。（中略）私は貪知の欲になやまされ，義勇奉公の勲功を立てんと欲して，之を為すこと能はず。而して，私は神の与へ給はざるものを取らんと熱中する天下の泥棒，大罪人である。私は罪悪の土塊であって，果して何も取るべきもの，神の聖旨に合するものは何もないだろうか。否ある，私の胸奥には，尚，神の愛慕する一片の至情がある。この至情には罪はない。さらば，今後，私はこの一片の至情に生きよう。（同上書　152頁—153頁）

海老名は，夕陽が御所の樹々を照らす中に，大きな欅の樹の周囲を徘徊し，且つ伏し，且つ祈り，自らの罪を悔いると共に，神の赤子として一生を捧げる道を求めて断腸の祈りのときをもった。これは海老名にとっては，ゲッセマネの祈りであった。

ある人びとは，海老名の神学は自由主義的で，海老名には罪の自覚が乏しいというが，海老名にとっては，自らの罪の深さを懺悔した21歳のときの回心の体験は，彼の生涯を貫いてその信仰生活の原点となっていたということは，否定出来ない事実である。

宮川経輝の内省

1886年４月22日，日本組合教会の設立にあたって京都に集った小崎弘道，海老名弾正，宮川経輝の三人は，畏友山崎為徳（1857—1881年）の墓をたずねている。後の組合教会の歴史において三元老といわれて重要な役割を果した彼等

三人がどのようなおもいで山崎の墓前に赴いたか充分知ることは出来ないが，宮川経輝の記録によると，小崎弘道は墓前で感涙にむせんで泣いたといわれている。（高橋虔『宮川経輝』昭和32年70頁）。彼らは，1881年に，わずか24歳で惜しまれて去った水沢出身のかつての級友を偲ぶとともに，新しく成立された組合教会の前途を思い，心期するところがあったにちがいない。

宮川経輝の日記をみると，しばしば，内省自戒のときをもっている。1881年10月29日の記録にはつぎのように記されている。

経輝は卑賤の小人なり。明治9年7月24日を以て，米師ゼーンズに就き受洗，基督の正道を奉ず。爾来6年の星霜を経ると雖も，霊魂上格別の進歩を見る能はず，深く猛省する時は衷心卑劣頑剛にして，基督信徒の名に背くを恐る。嗚呼予の稟生薄弱なる処あるか，魔鬼の誘惑強大なるか，（中略）霊魂は脆弱なり，肉慾は強大なり，何を以て魔鬼の陥穽に沈論せず，此の濁世を過すことを得ん。嗚呼エホバ此の罪奴を顧み，此の暴奴を愛せよ。（同上書，46頁）

このとき宮川は24歳であった。彼はたびたび他から招きを受けたこともあったが，終始一貫，大阪教会に留まり，その牧会に力を注いだ。彼の牧会の苦心談は『牧会百話』（警醒社大正4年）に記され，後輩の教職者たちの指標となっていた。

かつて，日本のキリスト教界にあって，海老名弾正と宮川経輝は二大雄弁家といわれ，つぎのように評されていた。

声量豊饒にして音吐高朗，反響頻る広くして巨鐘を聞くの感あるは宮川氏の雄弁なり。発音透徹，韻長くして鋭く，鏘鏗として銀鈴を鳴らすが如きは，海老名氏の雄弁なり。宮川氏は潟千里滔々として懸河の概あり。海老名氏は一揚一抑，整調頗る巧妙にして恰も音楽を奏するの趣あり。之を俳優に比すれば，宮川氏は団十郎の如く，雄大にして蘊蓄あり，海老名氏は菊五郎の如く，姿態横坐して精彩あり（高橋虔，前掲書　52頁）

宮川の記録によると，彼は，『七一雑報』に掲載されていたムーデーの伝記をよみ，ムーデーがはじめは非常に訥弁であったが，不断の努力によって大演説家になったことを学び，自分のようなものでも，努めて倦まずに練磨するならば，可成りの演説家となり得るであろうと思って精進したといわれている。

第4章　日本組合基督教会の課題

教会の自治と連帯

すでにのべたように，組合教会は，それぞれの教会の自治独立を尊重した。しかし，それは決して各個教会主義となることを意図したものではなかった。それぞれの教会の独立自治を尊重しながら，お互いの協力，一致をはかることが目的であった。それ故に，各個教会の自治と，全体教会の連帯をいかに均衡させるかということは，極めて重要な課題であった。組合教会の規約をみるとその目的はつぎのように記されている。

◎日本組合教会規約（明治19年4月22日）

第1条

目的　各地に在る独立自治の教会互に交誼を厚うし相い扶助し且各孤立して行い能はざる業を為さんため此組合を立つるものとす。但し名教会の内治には干渉せざるべし。

◎日本組合基督教会規約（明治37年）

第1条　本会は自治独立を主義とする基督教会にして本規約に同意するものを以て組織す

第2条　本会を日本組合基督教会と称す

第3条　本会の目的左の如し

1. 本会に加盟せる諸教会の一致協同を奨励し其進歩発達を図る事
2. 伝道，教育，出版其他の共同事業を起し教会の増設及び其拡張を図る事
3. 世界各国に於ける同主義の教会及び基督教団体と気脈を通じ神国の建設を図る事

これらの規約の表現は異っているが，組合教会の目的は，それぞれの教会の自治・独立を尊重しながら互いに協力することにあった。しかし，現実においては，ともすると各個教会中心に流れ，孤立割拠になりがちであった。その弊を正すため，毎年の総会，教師会（第1回，1895年）信徒大会（第1回1904年）婦人伝道会（1906年創立）などにおいては，構成員全体の交わり（コイノニア）を深くするように配慮がなされていた。右の第1回の教師会は当初堺市海浜望海楼で開かれるはずであったのが，のちに奈良市菊水楼に変更して開かれ，通称奈良大会といわれている。当時，国家主義の抬頭，アメリカン・ボードからの独立，そして新神学の影響などによって教会内には混乱と動揺が少くなく，しかもそれらに対処するに協力一致の精神を欠いていた。そこで奈良大会が開かれるに至った。その案内状は発起人たちの真情を伝えているのみでなく，今日的意味をもっていると思うのでその大要を記しておく。

熟々方今基督教会の趨勢を観るに我儕教役者の慎慮を要すべきもの二，三のみならず，諸教会は更に振興の兆を示さず，各伝道地は寧ろ衰退の色あり，牧師伝道師は懐疑の妖雲に埋没せられ勇往の元気乏しく僅かに孤塁を守りて応援の至るを待つものゝ如し，偶ま熱心の信徒有為の教役者ありと雖も，大勢の赴く処奈何ともなす能はず，手を拱きて回天の機運を望めるのみ，我儕彼を思い是を想ふて遂に黙するに忍びず，敢て我党の同志に訴へ其雲集を促し，共に胸中を談じ大に将来の計を画するところあらんと欲す

蓋し方今の弊は統一の運動を欠くに在り，孤立割拠するに在り，同志の精神明かならざるにあり，互に相疑ふにあり，今日に於て一堂の内に会し信仰を語り思想を談じ，其異同を判明して大に協同の精神を奮ひ，上は天父の聖旨をなし，下は同胞を救はんがために合同振起の策を講じ，且つ之を熱禱するは急務中の急務にあらずや

聞く我組合教会と親密の関係あるアメリカン・ボード伝道局は近々委員を派遣し本邦の伝道を視察するところあらんとすと，我儕諸氏を歓迎して其意見を叩き，併せて諸氏の為めに我等と所見を陳述するも亦決して無益ならざるべし，故に我儕発起人となり来る10月23日を期し，左記の方法に順ひ全国

の牧師伝道師会を泉州堺にに開会せんとす。諸君希くは皆悉く来集せられ以て我儕の微衷を徹することを得しめ給はんことを稽首謹言　(『基督教新聞』第635号，明治28年9月27日)

このような経過で組合教会の第1回の教師会が当初は堺であったが都合で奈良菊水楼で，1895年10月22日から24日にかけて開催された。そこでは，率直な所信の交換がなされ，最後の日は，朝5時半から三笠山で祈禱会をもち，懇談協議をなし，今後教師会を組織，継続することを決め，「日本組合教会教役者大会宣言書」を起し，同日夜には，はじめに12名の者の祈禱がなされ灯火の下に一同が二人づつ進んで決意をこめて記名した。記名者は54名，他に所用で記名出来なかったものが二人あった。宣言文は前文と五頭目からなっている。

我儕耶蘇基督を救主と尊信し神の召を蒙れる者大に慨する処あり茲に南都に会して天父に祈願し聖霊の恩化に浴し遂に左の綱領に従ひて福音を宣伝し神の国を建設せんことを決す

1. 罪悪を悔改し基督によりて天父に帰順すべき事
1. 人は皆神の子なれば互に愛憐の大義を全ふすべき事
1. 一夫一婦の倫を保ちて家庭を深め父子兄弟の道を尽すべき事
1. 国家を振興して人類の幸福を増進すべき事
1. 永生の望は信と義とによりて完うせらるゝ事

明治28年10月24日

(『基督教新聞』第640号・明治28年11月1日)

奈良大会は，外には日清戦争にともなう国粋主義の風潮が強まり，内には，新神学の影響をうけて信仰に動揺を来たし，日本の教会の独立を強調するあまり，外国宣教師やその背後にあるアメリカン・ボードとの関係に齟齬を来し，教勢は沈帯し，各個の教会の殻の中に閉じこもりがちであったときに，共に祈り，懺悔と決意の中に，共に目ざすべき共通の目標を再確認する意味をもっていた。その後，日本組合基督教会の年鑑ともいうべき『日本組合教会便覧』は，

引きつづいて，奈良大会宣言を，組合教会の「信仰の告白」とも巻頭に掲載しているのをみても，奈良大会の宣言がいかに日本組合基督教会の一致を促進する点において重要な意味をもっていたかをうかがい知ることが出来よう。

なお，日本組合基督教会の統計をみると，いわゆる大教会の本部に対する負担金の率はきわめて高く，各個教会の自主性の尊重は，決して大教会の各個教会主義を意味するのではなく，むしろ，財的基盤をもつ都市の大教会が進んで全体教会の経費を分担していたことを物語っている。

教会の独立と地方の教会

さきにもみたように，日本組合教会はいち早く日本の教会の自給独立を達成するように努力し，1905（明治38）年には，日本組合基督教会とアメリカン・ボードの委員の合同会議が開かれ，翌年より，日本組合基督教会が，アメリカン・ボードから独立することになった。（原田助『組合教会独立始末』明治39年）すでに，組合教会は，1878年より日本基督伝道会社を結成して，自主的な伝道をすすめてきたので，他の諸教派に比べるなら独立教会となった率は多かった。ちなみに1905年における独立教会と補助教会の数を各教派別にみると，組合教会は，独立教会33，補助教会37，日本基督教会は，独立教会22，補助教会47，メソジスト3派は，独立教会9，補助教会108，聖公会は，独立教会2，補助教会52となっている。（土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』1975年，114頁）

組合教会のミッションからの独立において，具体的に問題となったのは，40近い補助教会をどう扱うかという課題であった。いまその問題を，地方の小教会の伝道にあたっていた辻密太郎（1860—1945年）の記録から検討してみたいと思う。

辻密太郎は，播州加西郡中富に生れ，田島藍水の私塾［盍簪（こうしん）学舎］に学び，藍水から「真堂」という号を与えられた。しばらく姫路小学校の教師をしたのち，大阪英語学校に学び，1879年，沢山保羅から受洗した。周知のように沢山保羅は藍水の次女多苛（たか）を妻としており，初期の梅花女学校の働きに貢献した小泉敦も藍水の長女善（ぜん）と結婚しており，辻は大阪で小泉の家に食客となり，沢山

に導かれキリスト者となった。1881（明治14）年に同志社英学校に入学し，新島襄の薫陶をうけ，彼は終生沢山保羅を霊的慈母とし，新島襄を霊的慈父と尊敬していた。（杉井六郎『遊行する牧者—辻密太郎の生涯』教文館1985年55頁）

同志社在学中から地方の伝道にあたり，1885年から1886年にかけて熊本伝道にあたった。徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』によると，熊本で兄蘇峰が開いていた大江塾の塾生たちは，彼を除くとキリスト者はほとんどいなかったが，協志社から来た藤密太郎という男が熊本に来て熱心に伝道した結果，キリスト教は，にわかに学生たちの間にひろまり，かつては，吉田松陰の思想に傾倒していたものたちも，聖書を熱心によみ，十字架の福音をうけいれる者たちが続出したといわれている。ここでいう協志社から来た藤密太郎というのが，同志社の辻密太郎であり，すでに学生時代から伝道者としての情熱と資質をもっていたことを物語っている。

辻密太郎は，1886年5月1884年に上原方立が急逝したため同志社を中退して島ノ内教会の牧会，伝道にあたり1888年按手礼をうけさらに三重県の津地方の伝道にあたったのち，1891（明治24）年より甘楽第一教会の牧師となり同教会の基礎を築き，1894年からは，西群馬（高崎）に転じ，その年『携帯新約全書註釈』（全1冊，940頁）を警醒社より刊行した。

1895（明治28）年から新島の在世中の要請でもあった九州伝道にあたり，筑後三池組合教会ならびに肥後大牟田教会の牧会，伝道にあたった。1897（明治30）年から海外伝道を志し，はじめにハワイ伝道にあたり，パイア耕地，リフエなどで伝道，教育にあたり，1912（明治44）年から米国西海岸における邦人教会の牧会伝道にあたり，1933年に帰国し，1945（昭和20）年12月21日に85歳で永眠した。（前掲書）

彼の生涯を記した伝記には『遊行する牧者』という題名がつけられているが，それは，辻密太郎が他人の築いた城にあぐらをかこうとせずに，いつも開拓的精神をもって伝道，牧会にあたったからにちがいない。彼は，田島藍水の下で漢学の訓練をうけ，同志社では，第1期ではないが，熊本バンドの人びとにつぐ第2期のすぐれた仲間の一人であった。彼は1888年に按手礼をうけたが，これは，日本組合教会の按手礼でも第26号にあたるものであった。彼は，沢山保

羅と新島襄に直(じ)かに学んだ数少い先駆者であった。しかし，彼は，日本組合基督教会の歴史においては，殆んど顧みられなかった。

1942（昭和17）年に出された「日本基督教団第3部教師会員一覧」には255人の教師名が年齢順に出ているが，辻密太郎の名は含まれていない。彼は当時，82歳，筆頭に出ている堀貞一の前年の生れであり，当然最初に出てくるべき組合教会の先輩であったにも拘らず，彼の名が落ちていることには奇異な感を禁じ得ない。

日本組合基督教会は，1904（明治37）年の剣持省吾の朝鮮伝道をもって海外伝道の嚆矢としているが，辻のハワイ伝道は，それより6年前に開始されているにも拘らず，『日本組合基督教会総会記録』に収められている同年度の行事摘要にも何らふれられていない。

これに対して，ハワイヤン・ボードの記録には，辻が日本に妻と4人の子供を残し，そして10年にわたる牧会経験をあとにしてハワイの伝道に来たことを記録して歓迎している。（*Friend* Vol. 56, No. 8, 1898,『遊行する牧者』258—259頁）

辻密太郎のように困難な地方の教会伝道，牧会に尽力しながら組合教会の歴史の谷間に埋もれた人びとは少くない。一つには，組合教会においては，三元老に代表される熊本バンドの勢力がきわめて強く，それにつらならぬ人びとは比較的日の当らぬ場におかれたという傾向があったことは否定し難いことである。辻密太郎は，さきに記したように，沢山保羅と新島襄に学んだ人であった。その沢山保羅が日本組合教会が成立した翌年（1887年）に35歳で死し，新島襄がそれから3年して47歳で没したことは，日本組合教会にとって不幸なことであった。

さらに，辻密太郎のように，地方の弱小教会の牧会，伝道に懸命に働いた人びとの立場からすると，彼らの多くは，組合教会の中央の決定に参加し得ないのみでなく，ミッションからの独立にあたっては，当の補助教会の意向を充分ただすことなく切り捨てられるという苦悩を経験した。

1897（明治30）年10月，日本組合教会の独立の要請にしたがってアメリカン・ボードは，九州地方の伝道の援助を中止した。これにともなって，辻密太郎

をはじめ5名の教職者が連名でつぎのような辞表を提出している

〔辞表〕

不肖等

主ノ召ヲ蒙ムリ任ヲ九州伝道ニ任フコト茲ニ年アリ。信弱フシテ徳薄ク使命ノ万分一ヲ尽ス能サリシヲ愧ツ，今ヤミッションノ決議ヲ聞キ感ズル所アリテ各任地ヲ辞ス，従来ノ交誼ヲ謝シ併テ辞任ノ辞トナス

十月二十一日〔1897年〕

大牟田教会　辻　密太郎
福岡教会　森田大喜（亀）
山鹿講義所　寺田(岡)猶吉
水俣講義所　福田純郷
柳川講義所　高橋鷹蔵

日本ミッション御中

（『遊行する牧者』243—244頁）

教会の社会的責任

先述のように日本組合基督教会には，個々人の能力を尊重し，それぞれの独自性を活かして神と人とに仕えるという多様性を認めあう気風があった。画一的に人間の生き方を律するのではなく，組合教会は，それぞれの賜物（カリスマ）や特色を活かして用う自由主義の精神を大切にしていた。自由主義の精神には，二つの要素があった。一つは，各人の特性を活かす多様性の尊重としての自由主義，もう一つは，それぞれの賜物を用いて社会的責任を果そうとする開かれた自由主義がある。前者は，それぞれの個人の働きの多様性を認め後者は，各人を社会に向わせるパトスを提供した。しかし，それらには，それぞれ危険性が内在していた。多様性の尊重が重要であることは言をまたないが，ともすれば，無関心や無責任の立場が容認され，お互い同志の考え方の相異が微温的な交わりの中に隠蔽されてしまう危険性があった。さらに，社会活動が人間の能力や動機に根ざれると，理想主義的な傾向に走り，人間の根源的な罪性と弱さを認め

ながら福音による信従をなすのではなく，社会的な要請と信仰による神の国を同一次元上におく理想主義へとおちいる危険性を内包していた。

かつて（明治35年）『労働世界』誌が日本の宗教家と労働問題についての特輯を出したのを，『東京毎週新誌』が，その中から海老名弾正と植村正久の見解をつぎのように報じている。

▲海老名弾正君

労働者の為めに尽したいと云ふ希望は充分に持て居ります，上州に居た頃農民に伝道を試みて大に愉快に感じました，私の教会へ来て居る大学生の中には，労働者教育に熱心なる者余程ありますが，其中の一人は日本橋の資産家の子で在りまして卒業の上は専ら労働者の為めに尽したいと云ふて居ります，私は此人に大変望みを持て居ります。

▲植村正久君

今日の労働問題と教会とは相容れない者です。何ぜと云ふに今日の教会は資産家の寄附で維持されて居る者でありますし牧師も亦つまり資産家に養はれて居るのでありますから。

其の上に今の教会の趣味と云ふ者が全く労働者の趣味とは違ごうております。而して自分一個から云ひましても，私は労働者の教会へ来ることを好みません，腕まくりする様な連中の教会へ来ることを好みません。労働者などは相手にするに足らない。

（『東京毎週新誌』第991号，明治35年8月22日）

これらは，記者が訪問し談話でこたえたもので，断片的なもので，必ずしも全貌を伝えるものとはいいがたいが，労働問題に対する基本的な姿勢を知る手がかりとなる。両者ともに，労働問題についての専門家ではないことは明らかであるが，海老名の場合は，それに関心を示し，ふさわしい人材を発掘支援して労働者教育にあたらせようという開かれた姿勢を示しているのに対し，植村の場合は労働者を排除して教会を形成する姿勢が明確に出ていてきわめて対照的である。

明治期に同志社で学んだ人びとのなかには社会事業の実践に励んだ人びとが少くない。彼らの多くは，キリスト教に触発されて日本の近代化のなかで人間性をきづつけられた人々の隣人になるようにつとめた。そこには，D.W. ラーネッド (Dwight W.Learned) や J.C. ベリー (John C.Berry) などの宣教師の影響のあったことも見逃すことは出来ない。ラーネッドは，古典語を専攻し，教会史，聖書学などを担当したが，求めに応じて経済学を1878年から約15年間講義した。(D.W. ラーネッド『回想録』河野仁昭編，1983年，12頁—13頁) 彼はその中において，資本主義経済の問題を論じ，社会主義を紹介するとともに貧困や失業などの社会的要因について注意を喚起した。J.C. ベリーは医療を通して貧しい人びとに仕え，自ら監獄を訪ね，その改良の要を説いた。石井十次，留岡幸助，山室軍平，松尾音次郎，水崎基一，山本徳尚，牧野虎次，山川均，北畠素之などは同志社または組合教会の流れをくんだ人たちであった。

朝鮮伝道の開始

しかし，われわれは先人たちのすぐれた足跡を学ぶとともに，近代日本が日清・日露の戦争を経てますます国家主義の道を歩み，他に対しては，侵略的となり，内に対しては人権の抑圧を強くしていったとき，日本組合基督教会が果し得なかった社会的責任の限界やさらには，積極的に侵していった社会的な罪責を看過してはならない。その一つのケースとして，朝鮮伝道に対する日本組合基督教会の姿勢を検討してみたいと思う。

日本組合基督教会が最初に朝鮮伝道を開始したのは，1904年6月であった。その年の日本組合基督教会の活動の要報にはつぎのように記されている。

6月［1904年］

日本基督伝道会社韓国京城に伝道を開始し，主任者として創持省吾を派遣す

(『明治39年日本組合教会便覧』)

創持省吾による朝鮮伝道は，朝鮮にいる日本人の間でなされた伝道牧会であった。明治40年10月に大阪で開かれた第23回総会には，朝鮮伝道についてつぎのような報告が記録されている。

◎平壌伝道開始に関する報告（幹事沢村重雄氏）

昨年［1905年］5月常議員会は京城の創持省吾氏を平壌に派遣して該地の伝道に関し調査せしめたる結果爾後毎月1回同氏を出張せしむることゝなしたるが本年に至り愈定住伝道師の必要を認め7月山田兵助氏を派遣せり而して9月教会設立式と共に洗礼式を執行し目下信徒23名あり指定寄附月額金5円を支出するの好況を見るに至れり新伝道の開設は総会に於て決すべき問題なれども事急を要せしを以て常議員会の決議を経て決行せり。　（明治41年日本組合教会便覧』117頁）

なお1904（明治37）年10月に京都で開かれた第20回総会は，朝鮮駐在費180円，同講義所費360円の予算を承認している。こうして，平壌に1909年，京城に1911年に会堂が建てられた。

1910（明治43）年10月に神戸で開かれた第26回日本組合基督教会総会では朝鮮人伝道がとりあげられた。「総会記録摘要」をみると，それがはじめて提起されたのは，信徒大会で，つぎのような決議案が採決された。

決議案

今や国運大発展の時に際し，我邦内外の形勢は吾儕をして益々基督の福音を宣伝し，神国建設の大業に対する吾党の使命を思はしむる切なるものあり。而して過去5年間の伝道の経験に照し，就中今年度に於ける未曽有の好成績に鑑み吾儕は拡張伝道を以て最も神の聖旨に適へる伝道法なりと信ず。依って来年度に於ては益々大規模の拡張伝道を全国枢要の地に挙行すると同時に新たに加へられたる朝鮮同胞の教化に対しては同年度に於て速かに之が実行に着手し，茲に100年の大計を樹立し，以て基督を信ずる吾党日本国民の大責任を完ふせんことを期す　（明治44年『組合基督教会便覧』128頁）

信徒大会では，其資金の募集がなされ，1300余円が集められ，これをうけて総会は朝鮮伝道をすすめるために，長田時行を長とし，森田金蔵，小林富次郎，牧野虎次，安部清蔵の5人を朝鮮伝道実行委員として選んでいる。

朝鮮伝道実行委員会は，当時神戸教会牧師であった渡瀬常吉を朝鮮人伝道の主任として1911年6月に派遣した。彼は，かつて1899年から8年間，京城学堂長として働いた経験をもっていた。京城学堂は，押川方義や本多庸一などの日本のキリスト者が，当時の政界，財界の有力者の後援をうけて，キリスト教が充分に伝わっていない東洋の国々に伝道をなし，「清韓諸国ニ文明的教育機関ヲ起サントスル」目的をもって結成されたもので，文化，教育事業を通して，日本の朝鮮支配を容易にしようとする性格をもっていた。（飯沼二郎，韓晳曦『日本帝国主義下の朝鮮伝道』1985年，67頁—74頁）

こうして開始された組合教会の朝鮮人伝道は，「日韓合併」という国の政策の下に，日本の同化政策のわく組みの中で行われていった。

組合教会が従来の朝鮮在住の日本人伝道から一歩ふみ出して，朝鮮人伝道をはじめる総会の決議は，きわめて重要なものであった。信徒たちは，無批判的に朝鮮伝道を従来からの組合教会拡張運動の延長線上においてとらえ，朝鮮における日本の帝国主義的支配体制のなかで行われる伝道として把握していなかった。組合教会の指導者たちも，朝鮮伝道をなすことによって，政治的な「日韓合併」を機として，両国民間の連繋を密にしようと目論んでいた。そこでは，日本の「国運の発展」と「神の国の拡張」が同一次元上におかれ，さらに，朝鮮人を伝道の対象とみなし，その主体的独立や心情については何んら配慮がなされていなかった。

先述の朝鮮伝道の決議案を決定した信徒大会において，海老名弾正はつぎのようにのべている。

> 今や朝鮮伝道は日本人の愛国心に毫も衝突することなくして彼等の教化に当り得るの機会となれり，亦両国の基督者は黙契の時代を過ぎて公然基督の霊に接なりて手を握るを得るに至れり，日本人の衷情を以て彼等の衷情と結び付くるは吾人基督者を措いて国民中何人もあるなし，吾は朝鮮人に成り代りて諸君に懇願す，願くは基督の心を以て彼等を教化し，最高の処に於て両民族一となるの幸を得せしめよ（明治44年『組合基督教会便覧』127頁）

またその総会で海老名は礼拝説教を担当し，その終りに，福音に導かれた世界の民族が一大家族となるという理想をのべて，つぎのようにいっている。

近くは日韓合邦(ママ)の如き，啻に之を政治上の出来事と見るべきではない。朝鮮には30万の基督者がある。此朝鮮の基督者の心と日本の基督者の心とは，所謂以心伝心，深き高き所に互に共同の事業を挙げつゝある。之れは政治的の合邦(ママ)の到底及ばざる微妙なる神の力の現れである。基督の霊は古来国民間に相通じて神国を其間に建設したのである。　（前掲書　166頁）

朝鮮人の伝道といい，日韓両国のキリスト者の交流といい何れもきわめて重要な課題であることには異論をはさむ余地はない。問題は，朝鮮民族の自由と独立を日本の国が侵して植民地支配をなしているとき，それを前提にして，その体制を補足する形で伝道活動がとらえられていることにあった。海老名が「朝鮮伝道は日本人の愛国心に毫も衝突することなく」行われるようになったといっているのは，その姿勢をよくあらわしている。

さらに問題となるのは，組合教会の朝鮮人伝道に対して朝鮮総督府の機密費から組合教会に年額6,000円が匿名で寄付されていたということである。この点について疑問をもって反対をしたのが，湯浅治郎であった。彼は安中教会の会員であり，組合教会の会計をつとめていた。また湯浅治郎が属していた安中教会の牧師柏木義圓は，組合教会の朝鮮人伝道は朝鮮人の日本国民化であり，根本的に問題を抱える総督政治を是認し，その援助の下に伝道をはかることは，御用宗教である誤解を免れ難いとして強く反対した。（柏木義圓「渡瀬氏の「朝鮮教化の急務』を読む」『上毛教界日報』大正3年4月）

三・一独立運動に対する態度

1919年3月1日，朝鮮の独立を表明し，「三・一独立宣言」がなされ，各地で独立の宿願をあらわすのろしがあげられた。それをめぐって渡瀬常吉は，三・一独立運動を一部の宗教人の騒擾で，「宗教的迷信団」の動きであるとし，朝鮮総督府の同化政策を是認し，三・一独立運動を批判したのに対し，柏木義

圓は，その根には，「民族自決」の抬頭のあることを見抜き，「匿名寄附」を受けてなす朝鮮伝道を批判し，組合教会は英断をもって，朝鮮人伝道の責任者を更迭するか，それと関係を絶つべきであるとのべている。（飯沼二郎，韓晳曦，前掲書，93頁—98頁）

『日本組合基督教会便覧』（大正9年）は「三・一独立運動」について，つぎのように記している。

> 3月［1919年］朝鮮に於て，独立運動勃発し，長老監理両教派の信徒之に加はり，一大騒擾となれり。此間組合教会の受けたる困難なる影響なしとせず，信徒の脅威迫害を受けたる者少からざりしと雖も，幸に，結束堅固にして何等の動揺なかりしのみならず，時局に対し各地に於て挙行したる特別運動は機宜に適し，組合教会の主義精神を宣伝し得たり（『大正9年，日本組合教会便覧』，13頁）

さらに，組合教会の朝鮮伝道主任であった渡瀬常吉は1919年10月に大阪で開かれた第35回日本組合基督教会総会で朝鮮伝道の現況報告をなし，「三・一独立運動」を「騒擾」とよびその原因についてつぎのようにのべている。

> 騒擾の原因は，米国布哇上海及満洲西伯利亜に散在したりし，朝鮮における政治上の劣敗者たる事大党親露派及親米派と称せられし者が，天道教徒及長老監理両派の基督教徒と気脈を通じ，世界大戦後民族自決の風潮に乗じて男女青年学生，及十三道の民衆を煽動誘惑したる結果，茲に独立運動と為り一大騒擾を兇発するに至りしなり。一般民衆は李太王毒殺の風説に刺激され，独立の美名に迷はされ放火兇銃の脅迫に恐れ労働者の如きは日給を与へられて所在峰起盛に騒擾を逞ふしたり，騒擾の勃発中我が組合教会の受けたる影響は決して少からず，苦痛困難交も至るの有様なりき（前掲書，173頁）。

これらの報告は，三一独立運動を政治的に煽動された一部の宗教人の騒擾としてとらえ，その根本的な原因を把握せず，むしろ，組合教会が被害者であったかのような印象を与えている。

朝鮮伝道を推進するために，組合教会は，第28回総会（1912年）において「朝鮮伝道資金募金」を三カ年にわたり，3万円を目標としてなすことを決め，さらに1918（大正7）年から1920（大正9）年にかけて「朝鮮教化資金募集」をなし，50万円を目標としたが，実際には，その約5分の1に達した程度であった。これは，第1次大戦後の恐慌によって募金が困難となったことにもよるが，組合教会の朝鮮伝道が，三・一独立運動の前後から内外の批判をうけてきたことを反映している。

渡瀬常吉は，三・一独立運動後も，組合教会の朝鮮伝道を推進するが，その強調点は，朝鮮人を日本人にしようとする同化主義から，文化的理想の実現をはかろうとする文化主義に移っていった。これは，総督府の方針がかつての「武断統治」から「文化統治」に移っていったことにもよる。表面においては，朝鮮の文化的，経済的進歩がうたわれたが，しかし，日本の政治的植民地支配はその不動の前提であり，民族の独立と自由を主張する運動はきびしい弾圧の下に立たされていたことにはいささかの変りはなかった。

朝鮮伝道の放棄

曲折をたどりながらつづけられていた組合教会の朝鮮伝道は，1921(大正10)年に開かれた第37回組合教会総会で廃止され，朝鮮における所属教会を分離，独立させ，その名称を「朝鮮会衆基督教会」となした。これは，突如とも思われる急激な方針の転換であり，おそらく現場の教会にとっては，きわめて唐突なことで少からない戸惑いと不信をもったことであったにちがいない。その理由としてあげられることは，朝鮮総督府の責任者の交替により政策転換が行われ，従来のような支持を得られなくなったこと，また組合教会内部の朝鮮伝道に対する批判があったことなどがあげられよう。かねてから組合教会の朝鮮伝道に反対していた柏木義圓は，その間の事情をつぎのようにのべている。

> 曩(ま)きに寺内総督逝き，既にして長谷川総督去り，公正たる斎藤総督が朝鮮統治の任に就くや，組合教会は突放されて恰も木から落ちた猿の如く，事ここに至ては組合教会は鮮人教会を放棄するの外はあるまい。併しなかなか

放棄とは云はない。こゝに1条の活路を見出した。抑も活路とは何ぞ，鮮人教会の独立併し独立其実放棄であった。嘗て湯浅治郎氏は総会席上に於て質問して曰く，何故に鮮人教会に組合教会の主義たる独立自治の取扱ひを為さぬかと。当局者答へて曰く，鮮人は金銭の事に限って信用置けず，故に内地の教会の如くに独立自治を許せぬと。然るに財布を握って居る間は独立自治を許さないで，財源尽きて財布が空らになって放棄の外策なきに至って，始めて勝手に独立自治を為せとは随分である。而して鮮人教会の独立自治が組合教会に報告さるゝや，満場喝采，而かも吾人は唯亜然たるの外はなかった。斯くて鮮人教会は独立した。而して100余の鮮人教会と2万と称した其信者は煙散霧消して，唯僅かに柳一宣氏が孤塁を守って残るのみとなった。不純の動機に由る伝道の末路斯くなるは亦当然のみ。而かも永く之が日本人の鮮人伝道の妨害となるに至ったのは返す返すも遺憾である（柏木義圓「組合教会時弊論—1. 朝鮮伝道記念日廃止」，『上毛教界月報』昭和6年5月20日，引用文中に「鮮人」という言葉があり，これは，当然用いるべきではない表現であるが，史料としてそのまま記した。）

柏木は，組合教会の朝鮮伝道の終焉を放棄とよび，「木から落ちた猿のようように」とのべて辛辣に批判しているが，当時の組合教会の中には，その真意を理解した人は少かった。組合教会の大勢は，朝鮮伝道でおかしたあやまちを批判的にうけとめるのではなく，ますますその度を強くしていった国家主義的体制の中で，国家的政策遂行のためにくみこまれていった。

吉野作造の批判

柏木義圓の他にも，組合教会のなかにあって，当時の日本の朝鮮に対する政策に批判の意を表したごく少数の人として，吉田清太郎と吉野作造をあげることが出来る。吉田清太郎（1863—1950）は1910年の「日韓合併」を日本の自殺行為として批判した人として知られているが，（吉田清太郎『我と父とは一なり』E・N編1970年），その詳細は今後の検討に譲り，ここでは，吉野作造（1878—1933）の立場について触れておくに止める。

周知のように，吉野作造は，宮城県古川町に生れ，20歳のとき仙台バプテス

ト教会で宣教師ミス・ブゼルの感化によって入信し，東京帝国大学法科に学び，のちに政治学教授として活躍し，とくに大正デモクラシーの主唱者として広く知られている。彼は，海老名弾正が牧師であった本郷教会に属し，海老名を主筆として，本郷教会が発行していた『新人』の編集に参加し，長い間，ほとんど毎号主論文を寄稿していた。（竹中正夫「本郷教会の人びと」『本郷教会百年史』1986年287頁—289頁）

吉野作造は，1920年4月に発行された『新人』の第21巻，第4号に「朝鮮統治策に関して丸山君に答ふ」という一文を寄せている。これは，さきに吉野作造が，『新人』誌に，東京の朝鮮基督教青年会に対する総督府の取締りに対して抗議の一文（吉野作造「朝鮮青年会問題」(1)—(2)，『新人』第21巻2号，3号）を寄せたのに対し，朝鮮総督府の事務官をつとめていた丸山鶴吉が批判の一文を『新人』（丸山鶴吉「朝鮮統治策に関し吉野博士に質す」『新人』第21巻，3号）に掲載したのに反論して，吉野が応答としてこの論文を認めたものである。したがって，その大半は，東京の朝鮮基督教青年会に対する総督府の態度についてさかれているが，その論文の後半に吉野に短刃直入に丸山に朝鮮統治の基本的な理念について訊し，自らの考えを率直につぎのようにのべている。

一体丸山君などが朝鮮統治の理想を何処に置いて居らるゝのであろうか。同化か独立か，形式的融合か実質的融合か。当局者として統治の責任を感じて居られる以上，此の点に関する明答を承り度い。僕は多年の学術的研究の結果として此処に断言する。同化は先づ殆ど不可能である。若し朝鮮人を形式的に日本人たらしめんとするのが朝鮮統治の理想であるならば，これ程非科学的な事はない。然らば朝鮮統治の理想は日鮮両民族の実質的最高原理に於ての提携でなければならない。此処に於て我々は彼等に臨むに，否彼等と我々との間の関係を規律するには必ず普遍的な基礎に立って一致提携を図らねばならぬ。祖国の恢復を図ると云ふ事は，日本人たると朝鮮人たると支那人たるとを問はず，普遍的に是認せらる可き道徳的立場である。此処に共通な或る最高の原理を見ると云ふ事が即ち日鮮両民族の本当に一致提携すべき新境地を発見する事だろうと云ふのが僕の立場である（『新人』第21巻，第

4号)

「アジアの夜」ということばがある。それは，西欧人がアジアの人びとを武力で抑圧しただけでなく，アジア人がアジア人を殺戮し，虐げた悲惨な事実をあらわしている。かつて蒙古はアジアの夜をもたらした。そして「日韓合併」は，日本によって起こされた「アジアの夜」のはじまりであった。教会は，その中において抑圧された人びとの呻吟を共にして，夜明けを待望する視点に立つのではなく，むしろ，夜のとばりを背景として，人びとの交流をはかろうとした。この点からいうならば，吉野作造が，朝鮮総督府の要職にある人にむけて，国家を超えた普遍な道徳的立場を主張したことは，きわめて注目すべきことであった。そして，それは，彼のキリスト教信仰に根ざしていたことをわれわれはうかがい知ることが出来る。

第5章　同志社神学の課題

大塚節治の見解

戦前，戦後にわたって同志社神学の発展に尽力した大塚節治（1887—1977）はかつて，同志社の神学的伝統を省み，その特色としてつぎの5つの点をあげている。（『基督教研究』英文号，July, 1958）

いまその一つ一つを詳細に紹介することは出来ないが，そのテーマに多少の私の説明を添えあげておくにとどめる。

1. 弁証的神学 (The Apologetic Theology)，同志社の神学は，周囲がキリスト教でない日本の社会の中にあって，キリスト教の真理性を弁証する点に強調点をおいていた。教会で説く福音の真理を教義として体系化しようとする教義学的関心より，同志社においては，キリスト教を外部の人びとに弁証することに力をそそいだという。
2. それぞれの賜物と関心の尊重 (The Openness of Mind)，ある特定の神学的立場に固定するのではなく，自己の立場を主張する自由をもつと共

に，他者の立場を認め，自己を絶対化するのではなく，寛容な態度をもって共に学びあう姿勢をもつ。それは，超越的真理の存在を認めるが故に，自己を絶対化するのではなく，他者の立場を尊重すると共に，究極的には正しいものが存続するという信念に根ざしている。

3. 社会的実践的関心 (Social and Practical Concern)，初期の同志社で教鞭をとったアメリカン・ボードの宣教師たちのなかには，キリスト教の視点から社会問題を講じ啓蒙をなした人びとが少くなかった。その影響をうけて，社会的実践を志す人びとを同志社は輩出した。それぞれに与えられている賜物を尊重するという自由主義の精神は，多様な社会的な立場を生み，それらを福音の光の下に綜括し，批判的に検討する作業を必要としていたが，国家主義的な傾向が強まるにつれて，社会的責任が国家の要請のわく組みの中にとらえられていった。

4. 啓示解釈の歴史的発展 (Historical Development of the Interpretation of Revelation)

恐らく同志社の神学的性格において最も顕著なものは，この点にあるといってよい。イエス・キリストにあらわれ，聖書に証された啓示をそれぞれの歴史的視座のなかで解釈されて来たことを歴史的にとらえてゆく立場であった。日野真澄は教理史を通し，有賀鉄太郎や魚木忠一は，キリスト教思想史において，大塚節治は，神学思想の歴史的実証的研究において，それぞれ特色を発揮した。同志社大学の大学院の神学研究科の博士課程が歴史神学としておかれていることは偶然ではない。

5. 日本における福音と文化(The Gospel and Culture in Japan)，大塚節治は，日本の土壌における福音と文化の考究を同志社神学の第5の特色として挙げている。たしかに，初期の宣教師の一人であったL.M. ゴードンは，日本の宗教の分析をなし，池袋清風に指導をうけて初期の同志社人から歌人が輩出されたことも忘れてはならない。しかし，戦前においては，国家主義的な傾向が日本文化を支配するようになった。日本の諸宗教ならびに文化，思想と関連した研究は今後さらにすすめられるべき課題である。

同志社の存立について

1905（明治38）年6月に海老名弾正は，その雑誌『新人』に「同志社は果して存在の価値ありや」という一論を掲載した。これは当時の同志社の神学教育に対する批判であった。その論点には二つあった。一つは，神学思想の在り方についての批判であり，もう一つは，同志社の経済的自立体制が欠けていることに対する批判であった。海老名は，当時における同志社の二大欠点としてつぎの二つをあげ，それらを是正しない限りは，この時勢を乗り切ることは困難であるとのべている。

> 此時勢を切脱くるには同志社に二種の大欠点あり，一は神学思想の固陋にして時代思潮に伴ふことすら能はざる事，一は米国伝道会社の補助を受けつゝあれば，国民の自己意識を教化する権威を失したる事，是れなり。（『新人』明治38年6月，第6巻，第7号）

これら二つの欠点を論じたのち，海老名は，かつて同志社で訓練をうけたものが官立や私立の諸学校で教鞭をとっているし，同志社を卒業した教役者は全国の教会で青年たちの人材の育成にあたっており，同志社が古い固陋な神学に依拠している限りは，その使命は終ったのではないかと主張している。今日では，同志社は，アメリカン・ボードの補助は受けていないので，その状態は変っているが，同志社の神学がこの時代の課題にこたえて，主体的な展開をなしているかという問いかけは，今日でもきわめて切実なものであると思う。

『同志社神学叢書』

これよりさき，小崎弘道が同志社の社長をつとめていたとき，同志社は，警醒社または，大阪福音社と提携して『同志社神学叢書』を1891年から1895年にわたって刊行した。その第1巻の刊行の辞につぎのように趣旨が記されている。

> 論者或は曰く，我国キリスト教会草創の際に当り神学論の隆興を見る決し

て喜ぶべき事に非ず，今や実地の伝道に力を用ゆべき時にして不急の神学論に耽けるの時に非なり，と。吾人は神学論の隆興は果して喜ぶべからざるや否を知らず。然れども此事を知る。神学論の隆興は喜ぶ可からざるにせよ喜ぶべきにせよ必ず早晩来るべきの現象否己に来れるの形勢なるを。（中略）

我同志社神学校は我国神学校の最大なるものにして世人の望を属するや最も重し。吾人亦現今流行の神学論に多少の責任を尽す所なかる可らず。是に於て我同志社神学講談会なるものを起し，毎月1回同志社の教授其他の学士に請うて其意見を陳述せしむることあり。而して神学の教授等はゴルドン氏と余を以て之が委員に充て其講義の内最も適切なるものを撰て之を印刷に附し同志社神学叢書と題し之を公けにせむ（後略）

4月下旬〔1891年〕　京都同志社　小崎弘道識

右の「刊行の辞」で注目すべき点がいくつかある。第一は，新島襄のなきあと，同志社ならびに組合教会の内外に動揺があり，新神学の導入とともに，神学論に対する警戒がおきてきたこと。第二には，新神学ではなく，また，神学無用論に走るのではなく，聖書に根ざした同志社の神学をすすめる必要のあること，第三には，これがために，同志社神学講談会という研究会を毎月1回開いて同志社の教授やその他の人びとによる研究報告を中心に研究をなし，第四に小崎とゴードンとが委員となって，研究報告のなかから適当なものを選んで『同志社神学叢書』として刊行するようにはかった。

現存する同志社神学叢書から判断すると，同叢書は，1891年から1895年にわたって8巻が刊行されたことが推定される。主題から見ても聖書解釈に関係したものが多く，当時の新神学に対応して同志社の神学的研鑽がなされ，それが公刊されたものである。参考までに「叢書」の著者，表題，刊行年，頁数などの一覧を記しておく。

同志社神学叢書

第一　新約聖書約翰伝証拠論　D.W. ラーネッド著
　　警醒社，明治24年5月，44頁

第二　使徒保羅の伝へし福音　M. L. ゴードン著　警醒社，明治24年7月，34頁

第三　不　詳

第四　三位一体の説　小崎弘道著　警醒社，明治24年10月，30頁

第五　三福音書論　G.E. アルブレクト著　警醒社，明治24年10月，79頁

第六　約翰伝福音書批評 D.W. ラーネッド著警醒社，明治25年11月，53頁

第七　使徒保羅之改信　G.E. アルブレクト著　大阪福音社，明治25年12月，95頁

第八　四福音書可信論　ヒンクス著　大阪福音社，明治28年4月，29頁

活ける神学校のすすめ

神学教育が整備されるにしたがって，抽象的になり，理性的検討がすすむにつれて，リアルな信仰体験を欠落し，伝道へのパトスを失って形骸化することはしばしばみられる。同志社の神学教育においても，そのような傾向がなかったとは言えない。

のちに救世軍に投じて廓清運動に力を注いだ山室軍平は，困難をおかして同志社に来て1889年から1894年まで同志社で学んだが，彼は卒業を前にして，同志社を去って石井十次の故郷にある岡山孤児院の経営する宮崎県茶臼原の農業部で働いている。彼は開懇の仕事に従事しながら，聖書を学び祈りを共にしながら自らの歩む道を探求した。それは彷徨悶々の日々であったが，やがて彼が救世軍に赴くようになる大事な準備のときであった。

そのころ（1892年）ハワイから岡部次郎という伝道者が日本にやって来てハワイ伝道のために尽力する人物を熱心に勧誘した。彼は，同年3月31日から4月3日に大阪で開かれた第7回組合教会総会にも出席しアッピールをなし，また，同志社にも赴いて同様の訴えをなした。彼の訴えをきいたもののなかから奥亀太郎，奥村多喜衛，辻密太郎，曽我部四郎，大久保真次郎，鷲山誠晴などのように，のちにハワイ伝道に力を注ぐようになった人材があらわれた。日本でなした岡部次郎の演説の詳細を知ることが出来ないが，彼が自らの経験に照らしてハワイの伝道への参加を若い教職者や神学生たちにアッピールしたこと

が推察される。岡部次郎は，美以教会がすでに伝道がなされていたホノルルを避けて1889（明治22）年にハワイ島に赴き，ヒロ市を中心にして伝道をなし，日本からの移民労働者の間に入ってその苦悩を共にしながら福音を伝え可成りの成果をあげ，1891年1月にはヒロ教会（当初会員72名）の設立式をあげ，その初代牧師となった。(『遊行する牧者』前掲書268頁)

彼のハワイ伝道において注目すべきことは，伝道の現場を「生(いき)たるハワイの神学校」とよび，既成の神学校で職業的教授によって人為の神学を学ぶのではなく，ハワイの現場において聖霊を教師として生きた神学を学んだということである。彼は，当時横井時雄が発行人をつとめていた『基督教新聞』につぎのように自らの経験を記している。

一書拝呈いたし候。陳ば去年春中，米州オークランドに於て先生と始めて御面会の節は，小弟宗教的経歴が至て稚く，早速オベリン神学校に入るの用意罷在候処，天父の御意は他に在りて小弟そして彼の人為の神学校に入り職業的教授より人為の神学を学ばしむる代りに生(いき)たる布哇(ハワイ)の神学校に送り玉ひ，与ふるに聖霊の師を以てせられたり。　(『基督教新聞』第390号，明治24年1月16日)

彼が，「生(いき)たる布哇(ハワイ)の神学校」で学んだ教訓はつぎの二つの点にあった。

(1)先づ伝道者たるものは確乎動かすべからざる信仰を要す。たとへば永生を説くは易し，其説く所を悟り且つ確信するは難し，（中略）

(2)己れ生けるキリストの証拠人となりし後ち，社会を救ふべき方法手段を一定せざるべからず（中略）彼の乞食児を憐まずして乞食児を生ぜぬ方法を考へざる可からず，一言すれば社会問題に対する基督教主義を確定し正々堂々進まざるべからず。(『遊行する牧者』前掲書，272頁)

ここでわれわれが注目したいのは，ハワイ伝道の先駆者となった岡部次郎が，聖霊を教師として「生(いき)たる布哇(ハワイ)の神学校」で，労苦する日系移民労働者の間で学び，キリストの生ける証人としての自覚を強めると共に，労働者の人間

性を抑圧している社会問題に目をむけていることである。このことは，通常の神学教育を否定するものではないが，それがおちいりやすい抽象性を克服するためには，伝道牧会の場と密接に結びついてなされる必要があることを示唆している。

現場と結びついた神学教育の必要性は，たびたび指摘されながらも，各個人で志向するほかには，組織的になされることが少かったが，第二次大戦後，大下角一神学部長の下で行われたフィールド・ウワークの制度や，日本基督教団の京阪神三教区の職域伝道委員会，同志社大学神学部，関西学院大学神学部ならびに聖和女子大学宗教教育科などと連携して行った労働者伝道後援会の実習生制度などは，現場と結びついた神学教育の在り方を示しており，今日の同志社の神学教育において考えるべき素材を提供しているように思う。

むすびにかえて

われわれは，1886年4月に結成された日本組合基督教会の歴史を省み，その特色の長短について検討をなした。もとより，その一つ一つの課題についてさらに詳しい分析，吟味が必要であると思うが，これからの課題として考究するようにつとめたい。結びにかえてつぎの三つの点を指摘して，今後の歩みの参考としたい。

批判的視点

われわれがすでに概観したように，日本組合基督教会は交わりを大切にした伝統をもっている。教職者の交わり，信徒の交わり，そして教会相互の交わりなどを大切にし，教会をキリストを中心とした契約の民の交わり（コイノニア）としてとらえる考え方があった。しかし，その反面，ともすると，それが同族的交わりとなり，あるときは，微温的となり，あるときは閉鎖的となる嫌いすらあった。この点にあって，自画自讃におちいるのではなく，内外からの批判に耳を傾け，つねに自らの原点にたちかえって歩むことが必要である。近代日本の二人の基督教界の指導者が同志社の輩出した教職者に対して批判したことばがある。一人は内村鑑三のつぎのことばである。

同志社が出す人物には宗教家は少い。満更無いとは言えないが割合に少い（『内村鑑三全集』15巻，1981，243頁）

もう一人は，植村正久の批判である，彼は新島とその弟子たちについてこうのべている。

新島は日本伝道の一大預言者たるべき人であったが，洗礼を受けた企業的豪傑として畢ったのである。（中略）小さな新島が多く出て来て，続々と失敗するを見よ。事業の成らざるはまだしも，その霊魂をさえ亡ぼすに至るではないか(『福音新報』明治36年8月)

両者の批判の背景は異っているが，共通している点もある。わたしは新島は豪傑ではなかったと思う。肉体的には弱い人であり，精神的には苦悩した人であった。しかし，同志社の経営という事業に心労したことも事実である。しかし，その霊魂を彼が亡ぼしたとは思えない。とまれ，新島の流れをくむものにとって，植村の辛辣な批判を無視するのでなく，その働きを通して答えるものがなくてはならない。

新島のねがい

海老名弾正は，右の植村正久の新島批判にこたえて「福音新報の「新島襄」を読む」という一文を『新人』（明治36年9月）誌上に掲載し，新島を企業的豪傑とする植村の考えを正し，新島は至誠の人であり，教育の人であると同時に伝道の人であったことを論じている。

新島は，同志社の運営に心を砕きながらも，しばしば学生たちと共に伝道に行脚している。前記の辻密太郎は1883年8月同志社の学生であったとき，新島と共に彦根地方に伝道に赴いたが，そのときの新島が語ったことばをつぎのように記している。

我輩が立つにあらざれば誰か能く天下蒼生の為に斯る［伝道］の大責任を

果す者あらんや。

余は同志社の校長たらんよりは寧ろ田舎教会の牧師たらん事を欲す

辻君ともに大いにやろうではないか

（『遊行する牧者』前掲書，81頁）

新島にとって，教育と伝道は不可分のことであった。そして教育の場である同志社が大きくなるにしたがって形骸化したり，マンネリ化することをおそれたのは新島であった。新島が死ぬ一週間前に同志社の学生であった横田安止に送った書簡の一節を引用しよう。

何分学校が同志社に限らず，何れにも小刀細工の地に相成って大に困却仕り候。（中略）予は基督教徒に対し，著しき迫害の起り来りて，吾人の精神を骨髄迄も一新鍛練せられん事を望む。吾党の中近眼にして小成に甘んずる者多く，又困難にあはば頓挫し易く，実に大事に当り得ざるべしと，大に痛嘆致居り候。大概に申せば，悠々無頓着に日を送る者多し。何の効能もなく，アンビションもなく，将来の目的もなく，ヌラヌラ然たるナマコの如き者多し。ナマコも決して馬鹿には出来ず，たたけば固くなるの一奇事あり。此輩は叩く時には固くなり申すべきか。（横田安止宛新島書簡，明治23年1月16日付）

基本的姿勢

終りに日本組合基督教会の歴史を省みて，今日わたしたちが学ぶ姿勢としてつぎの三点をあげたい。(1)多様性のなかにある中心点としての＜キリストへの献身＞（Committment in Christ）(2)個性ある生き方の基盤にある核心としての＜キリストへの信従＞（Nachfolge in Christi）(3)日々に新しく生きる訓練（Discipleship in Christ）。これらは，先人たちがつとめたものであり，今日の私共への信仰の遺産である。先人たちは，それぞれの賜物を生かして，キリストを主と仰ぎ，この世においてキリストに従って同時代者の重荷を負って生きるようにつとめた。そこには，教会か世界かという二元論はない。また福音か

社会かという二者択一もない。聖書に証しされている啓示の光の下に，この世における使命を果し，福音のめぐみにこたえて，この世の責務にあたる姿を示唆している。先人たちは，固陋な保守主義を排し，奔放な自由主義を戒め，聖書に証された福音の光の下に，日本のキリスト者としての在り方を探索した。そこには冒険もあり，失敗もあったであろう。われわれは彼らを理想化してはならない。さりとて，われわれは，先人の築いた城にこもって化石のようになってはならない。先人たちが，冒険と失敗のともなう信仰の旅を歩んだことを忘れてはならない。もちろん，われわれは，好んで異端の道をとるものではない。しかし，異端とよばれることをおそれてはならない。イエスも「新しいぶどう酒は新しい皮ぶくろにいれるべきである」（マタイ9の17）といわれた。古い保守的な殻を破るということは異端となることではなく，むしろ日本の現実における新しい信従の道を開くことなのである。もとよりそれは，いたずらに新奇を装うものでなく，あくまでも，キリストを中心にした献身，信従，訓練に基づいたものでなければならない。そこに，プロテスタント教会の精神があり，また，日本組合基督教会の伝統があるといえるのではなかろうか。

戦後の同信会に委員長として尽力した三井久牧師のことばを記して本稿の結びとしたい。

> 合同教団が健全な発展をなすためには，組合教会の伝統である各教会，各伝道者の自治，自給，自由の特徴が生かされ，また弱い教会を援け，互に励ましあってキリストの福音が現代社会の中に生きて働くことでなければならない。（三井久「日本組合教会について」『キリスト教社会問題研究』第24号1976年3月17頁）